

前近代アラブ・イスラーム社会における〈同性愛〉 概念の誕生

辻, 大地

<https://hdl.handle.net/2324/7165088>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 辻 大地

論 文 名 : 前近代アラブ・イスラーム社会における〈同性愛〉概念の誕生

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本稿では、およそ9－15世紀におけるアラブ・イスラーム社会において、〈同性愛〉概念の誕生過程を明らかにすることを試みた。

序章では、セクシュアリティにまつわる研究と、イスラーム社会の歴史学的研究の両面から研究史を整理し、フーコーの示唆した「ソドミーから同性愛へ」という西洋近代社会を事例として生まれたテーゼが、イスラーム社会においても適用され得るのか歴史学的視点から検討する必要性を見出した。フーコーによると、前近代においてはあくまで「行為」に基づいた「罪」と認識された同性間での性行為・性愛関係が、19世紀に法学と医学の展開のなかで「同性愛者」という特殊な「性質」を本質的に持つ、特定のタイプの者によってなされる行為・関係とみなされるようになった。そこで先行研究では、このテーゼをイスラーム世界では、どのように適応されるのが論点となってきた。

一方で、西洋社会とは全く異なる社会にも、同テーゼを安易に踏襲することへの疑問も提出されていた。例えば、フーコーのテーゼを契機に盛んに行われた、本質主義対構築主義の議論を通じて、前近代の性愛を「挿入モデル」と呼ばれる構造が見出された。これは、年齢や身分による社会的ヒエラルキー（支配／従属）が、性行為における能動側（挿入側、主体）／受動側（被挿入側、客体）に対応するという構造から成り立っていることが、古代ギリシアの事例を対象に明らかになったものである。しかしこの「挿入モデル」の前近代イスラーム社会への無批判的な適用は、性行為の際の挿入側に注目を集め、受動側の者を等閑視する結果となった。また、構築主義的視線の興隆により、当該社会における人々が本来持っていたかもしれない本質主義的な視線にも、関心が払われなくなるという問題が生じた。

第1章では、前提として、前近代社会における同性間での性愛関係や行為への態度を、イスラーム法と医学という理念的な面から概観した。基本的にイスラーム法では、同性間での性愛関係や行為への強い忌避が示された。しかし、実際の法運用においては、同性愛的「行為」の有無と、その際の能動側／受動側の役割、そして年齢や判断能力の有無などによって規定される、行為者の社会的立場が重要視されていた。また、時代が降ると、実際の性行為はなくても、少年に視線を向けることや同席することまでもが議論に上るようになることを確認した。

また第1章では加えて、医学の視点から同性間での性行為の扱われ方を概観した。基本的には、行為において受動側の者のみが扱われ、そうした指向を持つことは「病」とあるとの記述がなさ

れていた。またそこには、生得的な性質としての病因が想定されていた。

第2章では、9世紀にイスラーム社会の中心で活躍した文人ジャーヒズの著作『ジャーリヤとグラームの美点の書』から、上記の点に留意しつつ当時の性愛構造を検討した。まず、この史料で用いられる用語法の分析・比較を行った。ここから性愛の場において重要であったのは、身体的な性ではなく、成人男性と「非・成人男性」という曖昧さを含んだ区分であり、各々の性交時における能動と受動の役割であった。さらに、ここで明確化された【成人男性＝挿入側（能動・主体）／「非・成人男性」＝被挿入側（受動・客体）】という可変的で曖昧な構造は、当時のイスラーム社会に通底していた「男らしさ」観によって成り立っていたことがわかった。

第3章では、特に9－11世紀イスラーム社会において、上で確認した「男らしさ」の獲得や放棄と、直接的に関わる異性装の事例を検討した。ここでは、従来、単に男装と女装とされてきた二分法的理解に対し、前章の成果から成人男性か否かという視点を取り入れた。その結果、当時の異性装は社会通念としての「男らしさ」観念とそれを放棄することによって得られる「女らしさ」と密接に結びついた行為であったことを明らかにした。ここからは、当該社会における成人男性を中心としたジェンダー構造が明確になると同時に、成人男性でありながら女性的な振る舞いを行うムハンナスという存在が、セクシュアリティに基づいたアイデンティティと性的指向を自認し、忌避されつつも「挿入モデル」の成人男性と非成人男性の垣根を乗り越えようとする存在であると認識される場合があることを指摘した。

第4章では、そうした理解を受けて、9世紀のアラブ・イスラーム社会に活動したムハンナスのアッバーダという人物を取り上げ、彼に付される言説を通時的に追うことで、ムハンナス概念の変遷を明らかにすることを試みた。結論としてアッバーダは、およそ12世紀までは必ずしも性愛にかかわらない、場の攪乱者となり得る属性に主眼が当てられていた。それが、およそ11世紀を境に逸話は、より体系的・実践的な知識として逸話集のなかで捉え直され、また外来の知と結びつくなかで、同じアッバーダの逸話であっても、それがムハンナスやさらには隣接概念のバグダーやマアブーン全体を代表する逸話として捉え直されたり、外来の医学知識に支えられた理念的な理解が「ムハンナスのアッバーダ」という人物にも言説上で付与されることとなった。

13世紀以降に没した著者による史料では、逸話集で形成されたムハンナス概念とアッバーダに付与されたトリックスターの性格が「史実」として組み込まれていった。これにより、アッバーダ個人の「特徴」・「行為」としての描写と、性的受動性という「性質」が結びつけられ、まさにムハンナスという語が、女性的に振る舞う者という理解から、本質的に性愛において受動側を指向する者を指すようになった。これはまさに近代に誕生した「同性愛」概念と類似した、イスラーム社会における〈同性愛〉概念の一端が、すでに誕生していたことを示していると言えよう。

